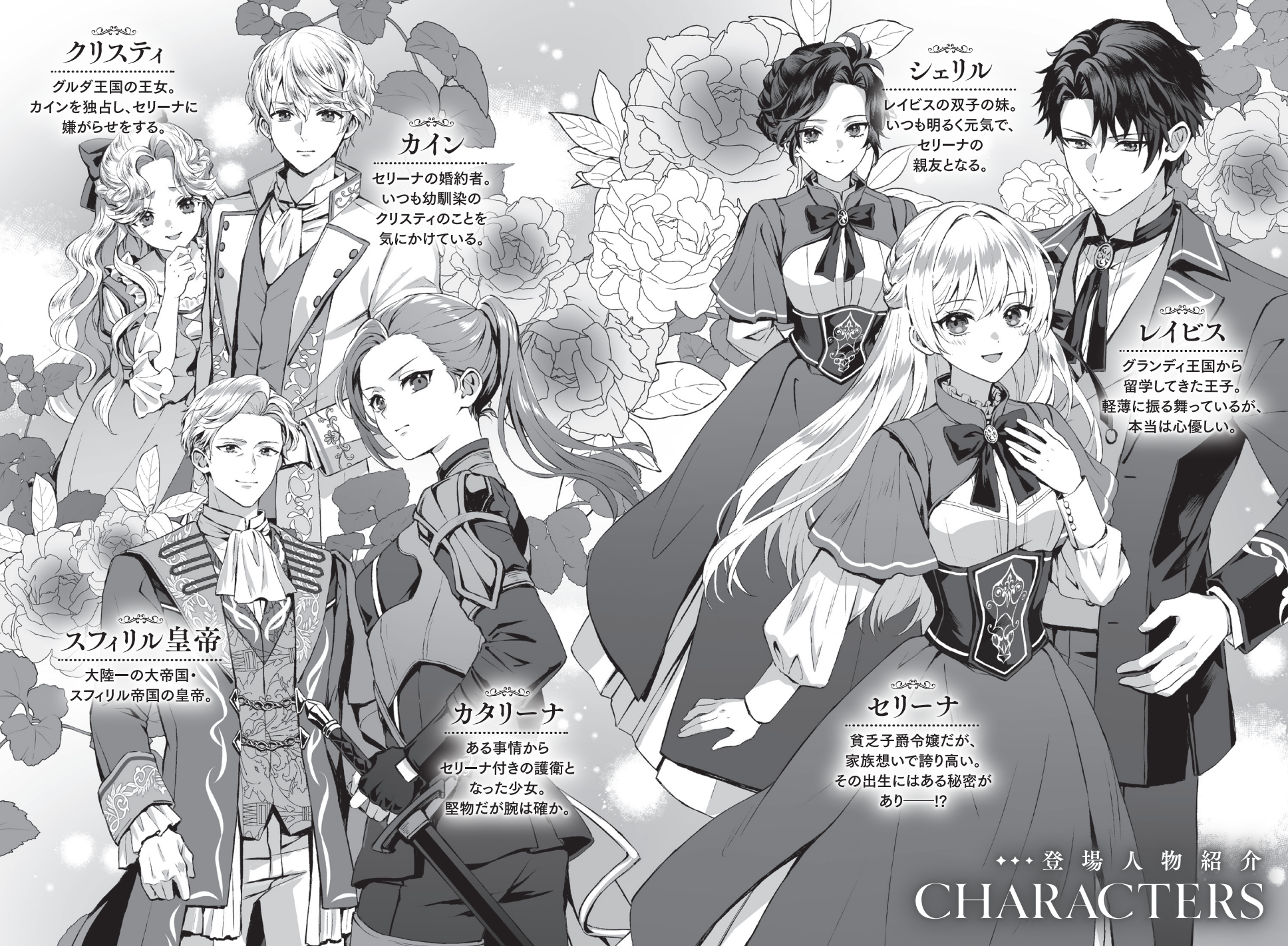


幼馴染の王女様の方が大切な婚約者は要らない。

愛してる？　もう興味ありません。



クリスティ

グルダ王国の王女。
カインを独占し、セリーナに
嫌がらせをする。

カイン

セリーナの婚約者。
いつも幼馴染の
クリスティのことを
気にかけている。

シェリル

レイビスの双子の妹。
いつも明るく元気で、
セリーナの
親友となる。

レイビス

グランディ王国から
留学してきた王子。
軽薄に振る舞っているが、
本当は心優しい。

スフィリル 皇帝

大陸一の大帝国・
スフィリル帝国の皇帝。

カタリーナ

ある事情から
セリーナ付きの護衛と
なった少女。
堅物だが腕は確か。

セリーナ

貧乏子爵令嬢だが、
家族想いで誇り高い。
その出生にはある秘密が
あり——!?

*** 登場人物紹介

CHARACTERS

第一章 婚約を解消いたしましょう

カイン様と婚約したのは五年前のこと。

「君がセリーナだね。僕はカイン。今日から君の婚約者だよ」

眩しいくらいにキラキラした笑顔を見ていると、自然と私も笑顔になっていた。

彼はいつも私に元気をくれる。金色の髪に蒼い瞳の、美しい婚約者。

はつきり言って、私の一目惚れだった。もちろん容姿以外にもいいところはある。

優しくて穏やかで、紳士的で……

でもそれは、悪く言えば優柔不断で流されやすく、誰にでも良い顔をするという意味でもある。

特にここ二年間、彼は幼馴染である王女クリステイ様のそばにベッタリだ。

王立学園に入学してからは一緒に過ごす時間がまったくなくなった。

最初は、仕方がないと思っていた。

クリステイ様の婚約者だった隣国の王太子シオン殿下が、突然ご病気で亡くなったからだ。

婚約者を亡くして、さぞお辛いのだろうと……

けれど、それから二年が経つというのに、今も彼はクリステイ様を優先し続けている。

私との約束なんて最初からなかったように、平気でキャンセルする。

理由は決まって「クリステイが……」だ。

それは、なんでも許される魔法の言葉なんかじゃないのに。

「すまない、セリーナ。クリステイが落ち込んでいるようなんだ。そばにいてやりたいから、今日の約束はキャンセルさせてほしい」

待ち合わせの時間に遅刻してきた彼は、また同じ言葉で約束をキャンセルした。

今日は、二人で街へ出かける予定だった。今度こそはと期待した私がバカだった。

何度も同じことをされているのに期待してしまうのは、彼のこと本当に大好きだから。

「たまには一人で過ぐすのもいいんじゃないか？」

たまには、なんて……彼には、いつだって私を一人ぼっちにしているという自覚さえないのだ。きっと私は今、ひどい顔をしている。笑顔を作っているつもりだけれど、きつとうまく笑えていない。

辛い、悲しい、寂しい……そんな感情が入り乱れた、ぐちゃぐちゃの顔だろう。

どんな風に笑ったらいいいのか、最近はわからなくなっていた。

他の人に私の顔を見せたくない、と彼に言われて伸ばした長い前髪のおかげで、そんな表情を見られずに済んでいるけれど。

「……わかりました」

たった一言、必死に絞り出した言葉。それだけ伝えるのが精一杯だった。

そんな私の気持ちに気づく様子もなく、彼はクリステイ様のもとへ走っていった。

彼の後ろ姿を見送りながら、涙が頬を伝う。

こんなことじゃダメだ。もっと強くならなくては。

そう自分に言い聞かせ、気合いを入れるために自分の顔をパンパンと叩いた。

寮の部屋に戻ると、侍女のメーガンはなにも聞かずにあたたかい笑顔で迎えてくれた。

こんなに早く帰ってきたのだから、またキャンセルされたと察したのだろう。それでも彼女はなにも聞いてこない。

彼女は私のことを、よくわかっている。その優しさがありがたかった。

誰かに話してしまえば、気持ちは楽になるかもしれない。

けれど、止まらなくなる。これ以上、惨めになりたくなかった。

まだ頑張れる。

だって私は、カイン様が好きなのだから——そう自分に言い聞かせた。

翌朝、何事もなかったかのように学園に登校した。

校舎までの道を歩いていると、いつものように悪口が聞こえてくる。

「彼女、まだ学園にいらしたのね。カイン様からの援助は打ち切られたのでしょうか？ 昨日、馬車の前にいらしたのをお見かけしたから、とうとう学費が払えずに逃げ出したのかと思いましたわ」

「お金がないなら、さっさと退学してしまっただけいいのに。いつまでも未練がましい」
 どうやら彼女たちは、昨日私がカイン様と待ち合わせしていたのを見ていたらしい。

私のブランカ子爵家は、あまり裕福ではない。というより、はつきり言って貧乏だ。それでも当主であるお父様は私と弟のサミュエルのために頑張ってくれている。カイン様に援助してもらったことなど一度もない。お父様をバカにされたようで、怒りがこみ上げた。

私は女生徒たちのほうに顔を向ける。

「面識のない私の心配をしてくださったのですか？ 学費はきちんと納めていますので退学の予定はございません。ご安心ください。では、失礼いたします」

まさか言い返されると思っていなかったのか、彼女たちは呆気にとられている。

今までどんな悪口を言われても言い返したことはなかったけれど、家族をバカにされるのは許せなかった。

貧乏子爵家の私は、他の貴族令息や令嬢たちからあまりよく思われていない。

その上、婚約者を王女様に奪われたと思われている私と仲良くしたい人なんていない。仲良くなんてしたら、クリステイ王女を敵に回すことになるからだ。

それでも友達になれたらと思って必死に話しかけたことはあるけれど、誰一人友達になつてはくれなかった。

教室に入ると、クリステイ様の笑い声が聞こえてきた。昨日、落ち込んでいた人とは思えない。

「カインたら、本当に面白いわ」

そう言いながら、彼女はカイン様の腕に触れる。

モヤモヤした気持ちになりながらも、私は二人に視線を向けずにして席についた。

視線を向けなくても、同じ教室にいるのだから声は聞こえてくる。

「君の笑顔が見たいからね。クリステイの笑顔は、本当に可愛いよ」

私の婚約者であるはずのカイン様が、他の女性を褒めている。そんな言葉、聞きたくない。

私がどんな気持ちでいるか、どんな顔をしているかなんて彼は気にもしない。彼の目には、クリステイ様しか映っていないのだろうか。

その一方で、私の姿を見てクスクスと嘲笑う声が聞こえてくる。

「彼女、本当に惨めね。クリステイ様に勝てると思っているのかしら？」

「カイン様とクリステイ様、お幸せそう。あんなにお似合いなのだから、邪魔するような真似だけはしないでほしいわ」

「暗くて地味で、見ているこっちが嫌な気分になるわ。同じ空間にいと吐き気がする。呪いでもかけられそうね」

私に聞こえるように言っているのはクリステイ様の取り巻きたち。ひどい言われようだ。

クリステイ様との話に夢中なカイン様は、この状況に気づかない。

最近が悪口だけでなく、持ち物を隠されたり捨てられたりすることも頻繁にある。

こんなことをされなければならないほど、私は悪いことをしたのだろうか。

授業が始まると、ようやく気持ちが落ち着く。さすがにあの二人も、授業中にイチャイチャしたりはしないからだ。

こんな学園生活を、二年も続けている。

憂鬱な授業を終え、寮に帰ろうと荷物をまとめていると、ハンカチがないことに気づいた。

どこかに落としたのかもしれない、探しに行こう。

急いで教室を出ると、男性にぶつかりそうになった。

「申し訳ありません！」

ぶつかる直前で止まれたけれど、驚かせてしまっただろう。

「大丈夫ですよ。おケガはありませんでしたか？」

思いがけず優しい言葉が返ってきて、思わず目を見開いた。

「あ、はい。大丈夫です。ありがとうございます」

この学園には、関係者しか入ることができない。先生にしては若すぎるけれど、制服を着ていないから転校生だろうか。

「すみません、実は迷ってしまつて。学園長室はどこらでしょうか？」

やっぱり、転校生のようだ。

「えっと……そこを右に曲がつて、真つ直ぐ行つたところです」

「ありがとうございます。助かりました」

男性はそのまま、学園長室に向かって歩き出した。

学園に入ってから、カイン様以外の男性と普通にお話したのは初めてのことで、少し動揺した。彼が右に曲がつたのを確認してから、ハンカチを探しに教室を出た。

「ない……」

今日行つた場所は全部見たけれど、ハンカチはどこにも落ちていなかった。

あのハンカチは、私の誕生日に弟のサミュエルが贈つてくれた大切なものだ。

「もう一度探そう！」

来た道をもう一度くまなく探しながら歩いていると……

「ご覧になって。あんな汚いものを必死に探しているわ。貧乏つて嫌ね」

「新しいハンカチも買えないなんて、可哀想」

ハンカチという言葉が聞こえて、彼女たちが隠したのだと気づいた。こんな、ひどすぎる。

「返してください！ とても大切なものなんです！ 返してください！」

私を見ながら笑う女生徒の前に立ち、必死にお願いする。

「新しいのを買つたら？ あんな汚いものを使われたら、この学園の品位が落ちるわ。あなた、仮にも貴族令嬢なのでしょう？」

「あんなものに必死になつて、なんて哀れなの？ あまりにも汚いから、ゴミ箱に捨ててしまつたわ」

捨てたと聞いて、彼女たちの笑い声を背に、急いでゴミ置き場に走った。

ゴミの中から必死にハンカチを探しながら、涙が頬を伝った。いつまでこんなことを我慢しなければならぬの？ 心が壊れてしまいそう……

「探し物はなんですか？」

そう声をかけられて、顔を上げる。そこには、先ほど学園長室の場所を聞いてきた男性の姿があった。

「……ハンカチです」

「わかりました。必ず見つけましょう」

男性はそのまま、私と一緒にゴミの山を探しはじめた。

名前も知らない男性が、どうして？ そう思ったけれど、今はその優しさに甘えることにした。「ありがとうございます」

ゴミ置き場を探しはじめて、二時間が経った。まだ見つかったてはないけれど、男性は文句も言わずにずっと探してくれている。さすがに、申し訳なさすぎる。

「あの……」

「ありました！」

もう大丈夫ですと伝えようとしたところで、男性は大きな声を上げた。

「本当ですか!？」

急いで男性に駆け寄り、彼の手の中にあるものを見つめる。

「これですよね？」

「はい……！ ありがとうございます！ 本当にありがとうございます！」

受け取ったハンカチを胸に抱きしめると、涙が溢れ出してきた。

「見つかったよかったです。では、私はこれで失礼します」

「あの……!」

見つかったことが嬉しくて、ようやく落ち着いて顔を上げると、すでに男性の姿はなかった。お名前を聞いておけばよかった。見つかったのは彼のおかげだ。

感謝の気持ちで、胸がいっぱいだった。

昨日のことがあったので、ハンカチは綺麗に洗った後、大切にしまっておくことにした。

お金はなくても家族三人で力を合わせて生きてきた。お母様が早くに亡くなったこともあり、サミュエルに対しては姉であると同時に、母親のような感情も抱いている。

サミュエルがくれたこのハンカチは私にとって、とても大切なものだ。もう二度と、失いたくない。

寮を出ると、カイン様が立っていた。クリステイ様を迎えに来たのだろうけど、少し早すぎる。二人きりになれる時間は貴重だから、嬉しくて胸が熱くなる。

「カイン様、おはようございます」

せっかく会えたのだから、彼がこんな時間に来た理由は聞かない。クリステイ様の名前をカイン様の口から聞きたくないからだ。

「おはよう、セリーナ。昨日は大変だったみたいだね」

私を心配してくださったのだと思い、さらに嬉しくなり口元がゆるむ。

「おかげさまで、無事に見つかりました」

「あんなに必死に探す必要はあったのかい？ ハンカチなんて、僕が新しいのを買ってあげるのに」

「……え？」

さっきまでの嬉しい気持ち完全に消え去ってしまった。

事情も聞かずに、ただ買い替えればいいと思っていることにも苛立ちを覚える。

それに『あんなに』ということは、私がハンカチを探していたところを見かけたのだろう。

それなのに、彼は声さえかけてこなかった。

「あんな真似は二度としないでくれ。なくなったのなら僕が新しい物を買ってあげるから。これは、君のためを思っているんだよ」

私のため？ 自分のためでは？

必死で探し物をする婚約者の姿を他の人に見られるのはみつともないと思っているのだろう。

サミュエルからの贈り物でなくても、物は大切にしたい。新しい物を買えばいいなんて、ちっと

も思わない。

この人は、私のことをなにもわかっていないのだ。

けれど、仕方がないのかもしれない。私のことを知ってもらう時間が、私たちにはないのだから。「カイン！ 今日早いね！ 窓からカインの姿が見えたから、急いで来たの！」

二人の時間は、クリステイ様の声ですぐに終わってしまった。息を切らせながら可愛い笑顔を振りまくクリステイ様を、愛おしそうに見つめるカイン様。

先ほどまで私に向けていた表情とはまるで違う。私はカイン様にとって、一体なんなのだろうか。

「走ったら危ないよ。ゆっくりで大丈夫だから」

「ありがとう、カイン。でも、早くカインに会いたかったの」

二人のこのを見てるのが辛くて、そっとその場を離れた。

「いつからこんなに臆病になったのかな……」

まるで婚約者同士のような二人を見て、なにも言えない自分に腹が立つ。

婚約者は私なのに……そう言いたいけれど、彼の答えはわかっていた。前に一度そう言った時に、「君は心が狭いのだな」とカイン様は言った。その言葉が私をどれほど傷つけたのかを、彼は知らない。

言いたいことも言えなくなった私たちに、未来はあるのだろうか。

「ねえ、見て。セリーナ様よ。昨日はずっと汚らしいハンカチを探してらしたんですって」

「ハンカチさえ買えないほど貧乏なの？ 本当に貴族令嬢なのかしら」

皆が私を見ながら噂している。内容を聞くまでもなく、私をバカにしているのだと表情を見ればわかる。

この学園に私の居場所なんてない。けれど、無理して学費を出してくれているお父様のためにも、学園を辞めて逃げるようなことはしたくない。

今日は、学園の講堂で夜会が開かれる。クリステイ様も元氣そうだったし、今度こそはカイン様と一緒に出席できるかもしれない。

そう思っていたのに……

今日も、彼は私との約束を破る。

「セリーナ、すまない。今日の夜会はクリステイと出席する。相手が見つからないらしくて、悲しそうにしていたんだ。君は強いから、大丈夫だよな？」

彼はわざわざ私に断りに来たわけではない。女子寮にクリステイ様を迎えに来たのだ。

クリステイ様のことはよく見ているのに、今、私が悲しそうにしているのは見えていないのだろうか。

毎月学園で開かれる夜会に、私たちは一度も一緒に出席したことがない。

今度こそは一緒に出席してくれると言っていたのに……なんて、何度同じ目に遭えば私は学習するのだろうか。

いい加減、私もバカなのだと思う。信じていた気持ちが強すぎるようだ。

君は強いから、大丈夫——なんて、カイン様には、私が強い人間に見えているのだろうか。

いつもは悲しい気持ちを隠すために、顔を見られないようにしてきた。けれど、今はあからさまに泣きそうな顔を見せている。それほど私は、限界だった。

強くならなければと思って頑張ってきたけれど、なんのために頑張っているのかわからなくなかった。

同じ学園に通っているはずの婚約者と一緒に過ごせる時間はまったくくない。

いつだって彼の隣には、クリステイ様がいるのだから。

仕方なく、一人で夜会に向かうことにした。

カイン様が好きな水色のドレスを着て、カイン様が好きな香りの香水をつける。

バカみたいだとわかっているけれど、少しでも彼に意識してほしかった。

講堂に入ると、くすくすと笑い声が聞こえてくる。

「今日も一人よ。惨めね」

「婚約者をクリステイ様にとられたのに、いつまでも引きずっているなんてね。私なら恥ずかしくて引きこもってしまうわ」

「いい加減、諦めればいいのに」

カイン様はまだ、私の婚約者だ。そう自分に言い聞かせる。けれどカイン様とクリステイ様が一

緒にいたるところを見ると、心が折れそうになる。

二人は私に気づくことなく、楽しそうに笑い合っている。カイン様の肩に、クリステイ様の手が触れた。嫌がる素振りもせずに、カイン様はクリステイ様に笑いかける。

この光景を見るのは、何度目……いや、何十回目だろうか。私が見ていることさえ、二人は気づいていない。

しばらくすると、二人はダンスを踊りはじめた。こうして見ると、美男美女の二人はとてもお似合いだ。

私はここに、なにをしに来たのだろう……

落ち込みながらも、せっかく来たのだから一人で楽しむことにした。用意された料理をお皿に取り、次々に平らげていく。

そんな私の姿を見て、周りはまた私をバカにする。けれど、そんなことはまったく気にならない。よく思われたい相手は、私をまったく見ていないのだから。

「んっ！ このお肉、すっごく美味い！」

食べている時は嫌なことを忘れられる。というより、食べている時は幸せな気持ちでいられる。

「そんなに美味しいのですか？ それなら、私にも一ついただけませんか？」

いつの間にか隣に、男性が立っていた。彼は、ハンカチを一緒に探してくれた男性だ。

「昨日はありがとうございました。お取りしますね」

そう返したところで気がついた。残っていたお肉が全部私のお皿に載っている。

「……食べます？」

少し気まずく思いつつ、お皿を男性に差し出すと、彼は気にした様子もなく「いただきます」と、お肉を一つ取って自分のお皿に載せた。

「うん、確かにこれは美味しいですね」

喜んでくれたことがなんだか嬉しくて自然と笑顔になる。

こんな風に笑えたのは、いつぶりだろう。

「ですよ！ あのケーキも美味しいですよ！」

「では、いただいてみます」

男性は、言われた通りケーキも食べはじめる。

他の人は会話やダンスに夢中なのに、変わった人だな。

なんて、私には言われたくないだろうけれど。

「セリーナ様、少しよろしいですか？」

料理の話に夢中になっていると、突然話しかけられた。

振り返ると、そこに立っていたのは意外なことにクリステイ様だった。

彼女の後ろには、当たり前のようにカイン様の姿がある。声をかけられたことに驚く私を気にもせず、クリステイ様は続けた。

「セリーナ様には婚約者がいらしたわよね？ それなのに、なぜレイビス様と？ 大人しそうな顔をしているのに、意外と狡猾なのね」

レイビス様？

なんのことかわからず、首をかしげながらクリステイ様の顔を見た。彼女の目が私に向いていないことに気づいて視線の先を追ってみる。

クリステイ様が見ているのは、私と話をしていた男性だった。どうやら、彼がレイビス様らしい。食べ物の中に夢中で、またお名前を聞くのを忘れていた。

「お料理の話をしていただけです」

先ほどのクリステイ様の言葉を思い出し、今になって腹が立ってきた。

『セリーナ様には婚約者がいらしたわよね？』なんて、どの口が言っているのか。

その婚約者と一緒に、クリステイ様はこの夜会に参加しているというのに……

「お料理のことでしたら、私のほうが詳しいですわ！ 私、食べることが大好きなのです。レイビス様、ご一緒してもよろしいでしょうか？」

カイン様と一緒に出席しているのに、クリステイ様はレイビス様を誘った。

私には、彼女の思考回路がまったくわからない。

「クリステイ様。そちらにいらつしやるのは婚約者の方ではないのですか？ 同伴者がいらつしやるのに他の男に声をかけるのは、いかがなものかと」

レイビス様が口にしたのは、私の思っていたことを代弁するような言葉だった。

にこやかに話しているけれど、クリステイ様のプライドをチクリと攻撃したように思える。

「彼は婚約者でもなんでもありませんわ！ セリーナ様の婚約者ですもの！」

クリステイ様が誤解を解こうと必死になったせいで、かえって墓穴を掘っていた。

「クリステイ様は、婚約者のいる男性を同伴者になさっているのですか？ いくら王女殿下とはいえ他人の婚約者を連れ回すなど、わがままがすぎるものではありませんか？」

なぜだかわからないけれど、レイビス様は私が今までずっと思っていたことを堂々と口にしてくれる。

心のモヤモヤがバツと晴れたような感覚。一方で、カイン様の表情が険しくなった。

「それは違います！ クリステイはなんにも悪くありません、僕が勝手にクリステイのそばにいますだけ。セリーナも同意してくれています！」

私がクリステイ様に嫌味を言われた時はなんにも反応しなかったのに、クリステイ様が言われるとカイン様はすぐに反論した。

私は同意などしていない。仕方がないと、諦めただけだ。

けれど今、決心がついた。

「カイン様、私は同意などしていません。私が意見を言うことなど許してはくたさなかったではありませんか。ずっと我慢していたことにも、お気づきにならなかったのでしょうか？」

「セリーナ……？」

カイン様は、なにを言っているのかわからないという表情を浮かべている。

「こんな私たちに未来はありません。婚約は、解消いたしましょう」

カイン様のことが好きだった。



最初は一目惚れだった。でも彼と過ごすうちに、好きなところが増えていった。優しいところも、笑った時にエクボができるところも、ちよっぴり怖がりなところも、辛いものが苦手なところも、雨が降ると髪がうねうねするところも、本当は少食なのに私に合わせようとしてたくさん食べようとしてくれるところも……全部、大好きだった。

婚約してから五年。私は大好きな婚約者と、別れる決意をした。

「セリーナ……？ なぜ……だ？」

まるで被害者のような顔で、彼は私に問いかける。

なぜ？ それは、私が聞きたい。

なぜカイン様は、婚約者の私よりもクリスティ様を優先していたのか。

誰がどう見ても、彼の婚約者は私ではなくクリスティ様だった。優しくすることが悪いとは思わない。現に、そんな優しいところも大好きだった。けれど彼はいつだって私ではなくクリスティ様を選ぶ。私がいつも悲しい顔をしていたのは、彼の目に映っていなかった。

「理由がわからないことが理由です。あなたは悪くありません……なんて、思ってもいないことを言うつもりはないので、優しい言葉は期待なさらないでください」

そこまで言っただけでお本当に理由がわからないのか、彼は私の目をじっと見つめている。

瞳を潤ませる彼は捨てられた子犬のようで、私が悪いのだと思えてくる。

本音を言えば、そんなに大事ならクリスティ様と婚約すればいいと言っただけで済ませたい。

それを言わないのは、これ以上惨めになりたくないからだ。

「カインを責めるのは筋違いではなくて？」

そこに口を挟んだのは、クリステイ様だった。

あのクリステイ様が、自分が悪いと思ってカイン様を庇う……

「そもそも、あなたが魅力がないのがいけないのでしょうか？ カインにとって私と一緒にいるほうが幸せだっただけよ。あなたにカインを責める資格なんてないわ」

……はずがなかった。

全ては私の責任だと言いたいようだ。

カイン様と違って、彼女は私が婚約解消を望んだ理由をちゃんとわかっている。

その分、タチが悪い。

「俺は、そうは思わないけどね。人の優しさを利用して自分の都合のいいように使っていたんだろ。自分が一番じゃないと気の済まない王女様のわがままのせいで、一人の女性が傷ついたということだと思っけど？」

レイビス様の口調が変わった。けれど、そんなことはどうでもよかった。

誰も私の気持ちなんて理解してくれないと思っていたけれど、レイビス様のおかげで少しだけ救われた気がした。

「レイビス様……そんな言い方、ひどいです！ どうしてそのようなことを……うう……」

クリステイ様は両手で顔を覆って泣き出し、カイン様に抱きつく。

その姿を見ていると、カイン様の気持ちが少しだけ理解できた。こんな風に縋^{すが}られては放ってお

けないだろう。優しいカイン様なら、なおさらだ。

私も彼女のように甘えられていたら、少しは違ったのだろうか。

「クリステイ……泣かないで。僕はそんな風に思っていないから」

婚約解消を突きつけられてショックを受けていたはずなのに、もう自分のことよりクリステイ様を優先する彼の姿を見て悟った。

誰にでも優しい男性は、もうこりごりだ、と。

「カイン様、後日正式に婚約解消の手続きをいたします。では、これで失礼しますね」

スッキリしたからか、最後に最高の笑顔を向けることができた。

ようやく彼の前で、心から笑うことができたのだ。

「セリーナ!? 待ってくれ！」

言葉だけで、追いかけてようとはしない。こんな状況でもカイン様はクリステイ様を選んだ。

そんなカイン様に、未練などこれっぽっちもない。

講堂から出て寮に戻ろうと歩いていると、知らない間に涙がこぼれていた。

「ふふっ……」

泣いているのか、笑っているのか……今の私はぐちゃぐちゃな顔をしているだろう。未練ではない。今までの辛い思いから解放されて、一気に気持ちが溢れ出したのだ。けれど、あんな人でもやっぱり好きだった。

寮の部屋に戻ると、メーガンがいつものようになにも聞かずにお茶を出してくれた。ソファアに座り、お茶を一口飲む。

「……美味^{おい}しい」

学園の卒業と同時に、私たちは結婚するはずだった。

二年我慢したのは、お父様が彼を気に入っていたことも理由の一つだ。あと一年、卒業まで我慢すれば……とも思ったけれど、たとえ結婚したところで問題が解決するわけではない。

結婚しても、彼はクリステイ様を優先するだろう。何年も、何十年も我慢することに耐えられる自信はなかった。

「お父様に、手紙を書くわ」

婚約解消のことを、お父様に伝えなければならない。

しかも嫌な噂が広まっているから、今後良い相手に恵まれるとは思えない。

私が六歳の時にお母様が亡くなり、お父様は再婚もせずに一人で私と五歳年下の弟のサミュエルを育ててくれた。

そのお父様にこんなことを伝えなくてはならないことが、悲しい。

第二章 私は自由

起きると、いつもの朝だった。朝の柔らかい光が窓から射し込んで、小鳥がちゅんちゅん鳴いている。

私の心中とは大違いの清々しい朝。大きく息を吸って吐く。いつまでも引きずるつもりはない。

昨日までとは、もう違う。

これからまたカイン様がクリステイ様と一緒にいるところを見ても、私よりクリステイ様を優先している……と思ひ悩む必要はない。あの苦しさから解放されたのだ。

今日から私は、自由だ。

これまでは服装も、彼の好みに合わせて地味なものばかりだった。あまり他の人に顔を見せてほしくないと言われ、目が隠れるくらいまで前髪を伸ばした。化粧が好きじゃないと言われ、彼と婚約してから五年間、ほとんどしていない。

パーティーの時でさえ薄く口紅を塗るだけだった。けれどカイン様に従う必要のなくなった今は違う。お洒落^{かっぴ}したいし、化粧もしたい。

「メーガン、お願い。とびつきり可愛くして！」

「お任せください！」

今までやりがいなかったせいか、メーガンは張り切っていた。前髪を切り、腰まで伸びた銀色の髪を梳かし、眉を整える。そして化粧をしただけで、鏡に映る姿が自分ではないように思える。

「セリーナ様の肌は雪のように真っ白なので、お化粧がよく映えます。長いまつ毛に大きな紅い瞳。こんな素敵なるものを隠すなんて、もったいないと思っておりました。セリーナ様、うっとりするほど美しいですよ」

さすがに褒めすぎだと思う。けれど容姿を褒められるのは、素直に嬉しい。

「ありがとう、メーガン」

前髪が短くなったからか、視界が明るい。

生まれ変わったような気分だった。いつもと同じ制服だけど、全てが違って見える。

寮を出て校舎へ向かう。寮は学園の敷地内にあり、校舎までは歩いて十分ほどの距離だ。

学園までの道を歩いていると、他の生徒たちが私を見てこそそとにかを言い合っていた。なにを話しているのかは遠くて聞こえないけれど、きつとまた悪口だろう。

視線を向けることなく歩いていると、誰かがこちらに向かって歩いてきた。

……カイン様だった。

「セリーナ、話し合おう」

朝から会いたくない人に会った。カイン様が私に話しかけたことが不満なのか、また周りの生徒たちがざわめきはじめる。

「あそこにいらつしやるのつて、カイン様と……」

「嘘、セリーナ様!？」

「一体どういうこと……?」

私たちを見て、驚いている。そういえば、こんなに大勢の生徒たちの前でカイン様が話しかけてきたのは初めてだ。

私とカイン様が一緒にいるのが、そんなにおかしいのだろうか。

「話し合う時間なら、いくらでもあったではありませんか。それを無駄にしてきたのはあなたです。今さら話し合うことなどありません」

そのまま通り過ぎようとすると、手首を掴まれた。

「セリーナ、僕は君を愛しているんだ!」

愛している——カイン様にそう言われたのは、婚約してから初めてのことだった。

あれほど欲しかった言葉なのに、今はもう心に響かない。

「愛してる? 私はあなたに、もう興味はありません。私は心が狭いのでカイン様を許すことはできません。離してください」

私は本当に心が狭かったようだ。いつか彼にそう言われたことを、ずっと忘れられなかった。

「君は、拗ねているだけだろう? クリステイのことを気にしているなら、そんな必要はない。彼女はまだの幼馴染だと何度も言ったはずだ」

カイン様が言い訳をすればするほど、彼への気持ちが冷めていく。

手を振り払おうとしたけれど、私の手首を掴む力は強くなるばかりだ。どうしたらいいのか戸惑っている……

「しつこい男は嫌われるよ?」

呆れ顔のレイビス様が私の隣に立っていた。

「あなたには関係ないでしょう!」

カイン様が、鋭い目つきでレイビス様を睨みつける。

いつも穏やかな彼のこんな顔を見たのは初めてだ。声も、いつもより低く感じる。

「君には王女様がいるだろう? 何年も彼女を優先して婚約者を蔑ろにしておきながら、今さら愛

してる? 笑わせてくれるね。その手、離しなよ」

カイン様の腕を、レイビス様が掴む。カイン様はゆっくり私の手首を離した。

どうしてレイビス様は、私たちのことをこんなに詳しく知っているのだろう?

「……セリーナ、すまなかった。君ならわかってくれると思うていたんだ。君を蔑ろにしたつもりなんかないし、クリスティを優先したつもりもない。君は僕にとって特別だ」

それが彼の本心だというのなら、私たちは一生わかりあえない。

私はただ、そばにいてほしかった。けれど、彼は私と過ごす時間よりクリスティ様との時間を選んできた。その自覚さえないのだから、なにを言っても無駄だ。

「この二年間、私がどんな気持ちでいたかわかりますか? 私はすでに、カイン様を忘れました。カイン様も、私のことは忘れてください」

ショックを受けて泣きそうになっているカイン様を置き去りにして歩き出す。そつと後ろを見やると、心配した女子生徒たちがカイン様を取り囲んでいた。

「彼女たち、男を見る目がないね」

なぜか、レイビス様が私の隣を歩いていた。

「先ほどは助けてくださり、ありがとうございました。あの……ずつと気になっていたのですが、レイビス様は一体何者なのですか? 初めてお会いした時とは、まるで印象が違います」

ハンカチを何時間も一緒に探してくれた時はとても紳士的だったけれど、今は話し方も仕草も軽そうに見える。

どちらが本当のレイビス様なのだろう。

それに、クリスティ様はチャホヤしてくれる相手にしか媚を売らないし、自分から関わりたくもない。昨日あんなに辛辣な態度を取っていたレイビス様に、クリスティ様がわざわざ自分から声をかけていたのが不思議だった。

「ああ、そうか。自己紹介がまだだったね。俺はグランディ王国第二王子のレイビス・グランディ。先日から、このグルダ王国へ留学に来たんだ。卒業までこっちにいます予定だから、転入生だと思ってくれていい」

グランディ王国……クリスティ様が婚約していたシオン様は、グランディ王国の王太子だった。第二王子ということは、今の王太子ということになる。だからクリスティ様はレイビス様に近づくたくて、一緒にいた私を不快に思ったのかと納得した。

「レイビス殿下は、どうして私とカイン様のことについてお詳しいのですか？」

レイビス様は私の耳元に顔を寄せ、「君に、興味があるから」と言った。あまりに顔が近くて、ドキツとする。

「からかうのは、おやめください。本当の理由を教えてください」

からかわれているとわかっていても、こんなに男性と顔を近づけたのは初めてで、戸惑ってしまった。今私は、顔が赤くなっているに違いない。

「残念、バレたか。殿下はやめてくれ。レイビスでいい」

軽い調子で言いながら、レイビス様はそつと私から離れる。ホツと胸を撫^なで下ろし、話の続きを聞こうとして彼の顔を見た。

「兄が亡くなり、第二王子である俺が王太子になって、クリステイとの婚約話が出たんだ。俺は彼女と婚約なんてしたくないから、色々調べさせた。で、カインのことや君のことを知った。嫌だと言ったのに、父は諦めていないんだろうね。クリステイのいるこの学園に無理やり留学させられてしまった」

クリステイ様の本性に気づいているレイビス様なら、婚約なんてしたくないと思うのも納得だ。

「それは災難でしたね。では、私はこれで失礼いたします」

親切にいただいたレイビス様には悪いけれど、もうクリステイ様に関わりたくはない。彼と話していたら、クリステイ様に恨^{うら}まれそうだ。

「逃げる気？俺たち同じクラスだから、よろしくね」

笑顔が怖い。関わりたくないと思っていることがバレバレだったようだ。

同じクラス……クラスはAクラスからEクラスまでであるというのに、カイン様とクリステイ様だけでなく、レイビス様まで一緒だなんて。平穏な学園生活は送れそうもない。

ようやく自分を取り戻すことができたというのに、前途多難なようだ。

教室に入ると、皆の視線を感じた。見られるのも噂されるのもいつものこと。気にはならないけれど、今日はなんだか様子がおかしい。

「誰？」

「このクラスに、あんな美しい生徒なんていたか？」

すぐにレイビス様のことだとわかった。彼から距離を取りながら、席につく。

「転入生に、もう少し優しくしてくれない？」

「申し訳ないですが、美形の方と関わるのは遠慮したいので」

青みがかった黒髪に藍色の瞳。形のいい鼻や口。同じ美形でもカイン様は幼さの残る可愛らしい顔立ちだったのに対して、レイビス様は大人びている。

どうやら私は、美形恐怖症になったらしい。

「俺を美形だと思ってくれるのは嬉しいけど、周りの生徒たちが言っているのは君のことだと思うよ？」

なにを言っているのだろう。そう思っただけで周りを見渡すと……

「もしかして、セリーナ様なの!?」

「あんなに地味だったのに……」

「婚約解消したなら、チャンスかもしれない!」

あれ? 本当に、私のことだったの?

確かに、メーガンには可愛くしてほしいと頼んだけど、前髪を切って化粧ただけでこんなにも反応が変わるもの……?

「セリーナ嬢! つ、次の夜会は、僕と一緒に行きませんか!」

今まで私をバカにしていた男子生徒が緊張しながら誘ってきた。それに続くように……

「いや、僕とご一緒してください!」

「抜け駆けするな! 僕とお願います!」

他のクラスの生徒まで誘いに来ていた。昨日まで私のことを散々悪く言っていたのに、あっさり手のひらを返すこの人たちに呆れてしまう。

これは、無視しよう。

視線を窓の外に向けて、完全に無視をする。

「横顔も可愛い……」

無視しているのに、彼らはまったく動じていないようだ。

「もうやめてください! もうすぐ授業が始まります。席に戻ってください!」

「怒った顔も、可愛い!」

なぜそうなるのか……こんな扱いを受けたことなんて一度もない私には、この状況をどうしたらいいのかわからない。

「レイビス様、助けてくださいよ」

私が困っているのを見て、なぜかくすくす笑っているレイビス様に助けを求める。

仲良くしないと決めたくせに、調子がいいことは百も承知だ。けれど、それほど困り果てていたのだ。

「はーい、皆聞いてー! 悪いけど、セリーナ嬢と夜会に行く約束をしているのは俺だから、諦めてね」

確かに助けを求めたけれど、な……なんてことを言ってしまったの!?

「……仕方ないか。レイビス殿下がお相手では勝ち目がない」

「諦めるしかないか……」

レイビス様の一言で、男子生徒たちはすぐと自分の教室や席に戻っていく。

グランディ王国は、大国だ。このグルダ王国とは比べ物にならないほどの力を持つ。友好関係を結んでいるとはいえ、敵に回したらひとたまりもない。

男子生徒たちが諦めてくれたことは助かったけれど、今度は女子生徒の目が怖い。

このことをクリステイ様が知ったらと思うと、平穏な学園生活なんて到底無理そうだ。

授業が始まる直前にカイン様が教室に到着したけれど、クリステイ様はまだ来ていない。

そういえば、カイン様は毎日クリステイ様を迎えに行っていたのに、今日は一人だった。まさか

クリステイ様は、カイン様が迎えに来るのを待っているのだろうか……？

一時間目の授業が終わっても、クリステイ様は姿を現さなかった。

そして二時間目が始まった頃、教室のドアが開いた。

「遅れて申し訳ありません……」

ドアのほうに皆の視線が集まり、クリステイ様が中に入ってくる。

「遅刻なんて珍しいですね。どうなさったのですか？」

先生に尋ねられたクリステイ様は暗い顔をしながら「なんでもございませんわ……申し訳ありません……」と理由を言わずに席についた。これではまるで、なにかあったから心配してと言っているようなものだ。

「クリステイ様、なにかあったのですか？」

「話してください！ 私たち、クリステイ様の味方です」

授業中だというのに、クリステイ様の取り巻きが心配そうに声をかける。その反応を待っていたとばかりに、クリステイ様は顔を両手で覆って泣き出した。

「皆、ありがとう。私のことは、気にしないで」

泣き止んだと思ったら、今度は悲しげな表情を浮かべて物思いにふける。そんなクリステイ様に、カイン様が声をかけた。

「クリステイ、どうしたんだ？ なにかあったのか？」

他の人とは視線も合わせなかったクリステイ様が、カイン様の目を見つめて瞳を潤ませる。

それでいてチラチラとレイビス様のほうへ視線を送っているところを見ると、心配させたかったのは彼のほうなのだろう。

そのレイビス様というと、クリステイ様に興味がないのか頬杖をつきながら窓の外を見ている。先生はクリステイ様の様子にあたふたして、授業は進みそうにない。

「朝起きたら、部屋のドアの下にこの手紙が挟んであったの……」

クリステイ様は震える手でカイン様に手紙を差し出した。タイミングよく涙が頬を伝う。まるで演劇を見ているようで、感心してしまった。

「……これは、なにかの間違いでは？」

手紙に目を通したカイン様は、低い声で呟いた。なにが書かれているのかはわからないけれど、怒っているようにも、悲しそうにも見える。

「カインなら、誰が書いたものかわかるでしょう？」

その言葉を聞いて、カイン様が私のほうを見た。そして、こちらに向かって歩いてくる。彼はバンツと勢いよく私の机の上に手紙を置いた。

手紙を見ると、クリステイ様を脅すような言葉とともに、カイン様を返せと記されている。

なぜか、私の文字で……

「セリーナ、言いたいことはあるか？」

私はこんなもの書いていないし、クリステイ様に送ってもいない。それに、カイン様とやり直すつもりもない。

けれど、他の人が見たら私が書いたのだと誤解してもおかしくない内容だ。文字を真似されたと
言ったところで、私を信じてくれる人なんていない。先ほど私を夜会に誘っていた男子生徒たちも、
私に怪訝^{けげん}そうな目を向けている。

「知らないと言ったら、私を信じるのですか？」

カイン様は、なにも答えずに下を向いていた。

信じるとはつきり言えないのは、信じていないことの証拠だ。彼と別れたのは正解だったと確信
した。

「そんなの、いくらでも偽造できるよ。セリーナ嬢はそんなことしない。そもそも、セリーナ嬢か
ら婚約解消したのに、なんで今さらそんな手紙を出す？」

誰も信じるはずがないと諦めていたのに、まだ出会って間もないレイビス様が、私を信じてく
れた。

クリステイ様が嫌いなだけかもしれないけれど、一人でも自分を信じてくれているのだとわか
ると、それだけで胸が熱くなった。

「確かに、自ら婚約解消を告げたのに、カインを返せというのはおかしいな」

レイビス様の言葉で、教室の空気が変わる。

「それに、その手紙の内容……よく読むとクリステイを悪く言っているようで、実は褒めてない？
^{おど}脅す相手を褒めたりなんて、普通はしないと思うけど。そういえば、クリステイの侍女は文字を真
似るのが得意だと聞いたな」

レイビス様に言われて、改めて手紙の内容を読み返してみた。

『美しくてなんでも持っているクリステイ様に、カイン様は必要ないと思います。カイン様を返し
ていただけないのなら、綺麗すぎるそのお顔が傷つくことになります』

「これ、褒めているな……」

「まさか、クリステイ様が自分で侍女に書かせたのか……？」

皆が一斉に、クリステイ様の顔を見る。

「私は被害者なのに、なぜそんな目で見るの？ 皆ひどいわ！」

クリステイ様がまた泣き出して、取り巻きや先生がオタオタしながら慰^{なぐさ}めている。

「君も災難だね。わがままな王女様に目をつけられて」

レイビス様はそう言ったけれど、事の発端はレイビス様だと思う。昨日、私がレイビス様と話し
ていたことがクリステイ様のカンに障ったのだろう。

「また助けてくださり、ありがとうございます」

助けてもらったのは事実だ。素っ気ないお礼になったけれど、感謝はしている。

けれど、あまり関わりたくないという気持ちは変わらない。

はあ……と、深い溜め息をつくとき、カイン様が私の頭に手を乗せて軽くポンポンと叩いた。

「君がこんなことをするはずないと、僕は信じていたよ」

目を細めて微笑んでいる彼の手を思いきり振り払い、睨^{にら}みつける。

『信じていた』なんて、どの口が言っているのか……

「平気で嘘までつくようになったのですね」

自分の見る目のなさにも、落ち込んだ。一目惚れではあったけれど、中身も好きだったはずだから。

「嘘じゃない！ 僕のこと、信じてほしい」

この人の、なにを信じるというのだろうか。

散々約束を破って、私がどんな思いをしていたかも考えなかった彼のことを、信じるなんてできるはずがない。

「そうだ！ 次の夜会是一緒に出席しよう！ 昨日のドレス、すごく似合っていた。香水も、僕の好きな香りを選んでくれたんだろう？ 次の夜会用のドレスは僕がプレゼントするよ！」

どうして今さら……としか、言いようがない。ドレスにも、香水にも気づいていたなんて。そんなことを今さら言われても、彼への想いは消え去っている。

「……先約があるので。申し訳ありません」

レイビス様に言われたことを、利用させてもらった。皆の前であんなにはっきり言ったのだから、レイビス様と夜会に出席することになるだろう。

だから、嘘は言っていない。

「そうか……わかった……」

明らかに悲しそうな表情で肩を落としながら自分の席に戻っていくカイン様。

今まで散々私との約束を破ってきたのに、あんなに傷ついた顔をするのはずい気がする。抱か

なくてもいい罪悪感を、抱いてしまう。

クラスの生徒ほとんどが、手紙のことを忘れてクリステイ様を元気づけようと必死になっていた。結局、カイン様もそれに加わった。

クリステイ様には、お兄様が二人いる。二人のお兄様に甘やかされて育ったからか、自分の思い通りにならないと泣き出してしまう。

可愛らしくて守ってあげたくなる気持ちはわからなくはないけれど、他人の婚約者を我が物顔で独占していたクリステイ様を、好きになることはできそうにない。

結局、『クリステイ様は悪くない』ということで落ち着いた。

王女様を責めることなんて、誰にもできはしない。

第三章 シェリル王女

昼食の時間になり、一人で食堂に向かう。貴族の子供たちが通う学園だけあって、学生食堂といつてもとても豪華だ。

もちろん出される料理も一級品。それでも学食なので、どれも値段が安い。貧乏子爵家の私としては大変助かっている。

「AセットとBセットを一つずつお願いします」

実を言うと、私は大食いだ。二つのセットを頼んでも、全然足りない。それでも節約しているのだ。料理を受け取り、空いている席に座る。

「いただきます」

食事の時間は、大好きな時間だ。色々あつたけれど、料理は私を裏切らない。

味わって食べていると、目の前の席に誰かが座った。

顔を上げると……レイビス様……によく似た女の子がこちらをじつと見つめていた。

なにも言わずに、じつと私を見ている。

「あの……」

視線に耐えきれず、声をかけてしまった。すると、女の子は目を輝かせて口を開いた。

「あなたが噂のセリーナ様でしょうか？ ここに来るまで散々噂されているのを聞いたわよ。本当にお美しいわ！ そんなに細いのに、たくさん食べるのね。私たち、良いお友達になれると思うの！」

「えっと……」

なにから突つ込んだらいいのか。彼女は一体、誰なのだろう？ その答えは、すぐに出了。

「シェリル!? おまえ、大遅刻だぞ」

「お兄様こそ、遅いです。お腹が空きすぎて倒れてしまいそうですわ」

現れたのはレイビス様。話を聞くに、二人は兄妹のようだ。

「セリーナ嬢が驚いているだろ……。セリーナ嬢、これは双子の妹のシェリル。妹も先日からの学園の生徒なんだ」

似ているとは思ったけれど、まさかレイビス様に双子の妹がいたなんて。双子なら、こんなにそっくりなのも頷ける。

「セリーナ様、よろしくお願いいたします」

女性だからか、レイビス様よりも笑顔が柔らかい。

「こちらこそ、よろしくお願ひいたします」

「授業はサボったのに、堂々と食事に来るなんていい度胸だろう？ ちなみに、シェリルも同じクラスだ」

どうしてまた、同じクラスなのか……

「セリーナ様、ごめんなさいね。お兄様は軽いように見えて、ものすごく軽いから。気をつけてく

「ださいな」

それは、ただの悪口なのでは……

「フォローになつてない！ 余計なことを言うな」

「フォローするつもりなんてありませんわ！ だいたい、私がセリーナ様とお話ししていたのに、邪魔しないでくださる？」

この二人は、仲が悪いのだろうか。

「あの……早く食べないと、お昼休みが終わってしまいますよ？」

なぜか目の前で兄妹喧嘩を見せられているけれど、嫌な気分ではなかった。私にも弟がいるけど、五歳も離れているせいかこんな風に喧嘩したことはないから、ちよつと羨ましい。

「セリーナ様は、なんてお優しいのかしら！ やっぱり、私たち良いお友達になれると思う！」

双子でも、性格はあまり似ていないみたい。

シェリル様の第一印象は、元気で明るい子だった。

レイビス様とシェリル様は料理を頼み、改めて三人で昼食をとる。話してみると、シェリル様はとても楽しい方だった。

「私ね、王女としての知り合いや交流のある方はいるけれど、親友と呼べる相手はいないの。だからお兄様からセリーナ様のお話を聞いて、仲良くなれたらいいなと思っていたのよ。よかったら、お友達になつてくださらない？」

親友と呼べるような相手は、私にもいない。学園に入学してからは、特にだ。

友達が欲しいと思ったこともあつたけれど、誰も私と口をきいてくれなかった。

「私でよかったら、お友達になりましょう」

友達になりたいと言ってくれた人も、初めてだった。だから、素直に嬉しい。

「俺には冷たいのにシェリルとは友達になるなんて、ひどくないか？」

レイビス様はくちびるを尖らせて拗ねている。

「お兄様が拗ねても可愛くありませんわ。そろそろお昼休みも終わりますね。教室に戻りましょう」

はつきりものを言うシェリル様とは、私も仲良くなれそうな気がした。

教室に戻ると、皆がいつせいに振り向いた。

「レイビス殿下が……二人？」

「私の目がおかしくなつてしまったの？」

レイビス様は昨日の夜会に参加していたけれど、シェリル様は午前の授業にも来ていなかったのだから、驚く気持ちは私にもわかる。双子だけあって、二人は本当にそっくりだ。

「皆様、初めまして。私はグランディ王国第一王女、シェリル・グランディと申します。つい先ほどセリーナ様とお友達になりましたの。これから、よろしく願ひいたします」

シェリル様は完璧な笑顔で生徒たちを魅了した。先ほどまで私と話していたシェリル様とは雰囲気が違う。これが大国の王女様なのだと感じた。

「まあ！ シェリル様ではありませんか！ お元気でしたか？ まさかシェリル様まで我がグルダ王国にいらしてくださると思いませんでしたから、光栄ですわ」

たった今シェリル様に気づいたように、クリステイ様は大袈裟に驚きながら声をかけた。

シェリル様に魅了された周りの反応が気に入らなかったのか、笑顔を装ってはいるけれど表情が強張っている。

「おかげさまで、とても元気ですわ。お兄様に変な虫がついては困りますから、私もついてきましたの。クリステイ様のほうは、以前とまったくお変わりないようで安心しました」

笑顔で会話しているのに、バチバチと火花が散っているようだ。明らかに、お互い嫌い合っている。

その様子を、レイビス様は欠伸びながら見ていた。クリステイ様の笑顔が引きつり、言い返すことができなくなったところで会話は終了した。

かつては王太子だったシオン殿下の婚約者という立場で接していたのかもしれないけれど、今は違う。大国の王女様に喧嘩を売るわけにはいかないと、さすがにクリステイ様も我慢したのだろう。

「セリーナ様、私の席はどこかしら？」

「私の後ろの席が空いてます」

私たちが席に座ると、すぐに先生が入ってきて授業が始まった。

シェリル様が転入してきたことで、クリステイ様の態度が少し変わったような気がする。

寮に戻ると、シェリル様が部屋を訪ねてきた。

「来ちゃった」

舌を出して可愛く『来ちゃった』なんて、まるで彼女彼女のようなのだ。まだ知り合ったばかりだけれど、教室でのクリステイ様との対決ぶりを見たからか、なんだかとても可愛らしく思える。

本当のシェリル様は、人懐っこくて親しみやすいように感じた。

「こんな風に友達の部屋に来るのが夢だったの！」

笑顔でそう言いながら、部屋の中を見渡す。

私も、友達を部屋に入れたのは初めてだ。嬉しくて口元がゆるむ。

「珍しいものなんてないでしょう？ 座って、お茶でもいただきますしよ」

メーガンにお茶を用意してもらい、ゆっくり話をすることにした。二人で並んでソファに座りながら、他愛もない話をしてお茶を飲む。

とても、居心地のいい時間だった。出会ったばかりなのに、心を許せる気がする。

「そろそろ敬語はやめない？ それと、私のことはシェリルって呼んでほしい。ね？ セリーナ」
強引だけど、嫌じゃなかった。

「わかったわ、シェリル」

他国の子爵令嬢にすぎない私を、彼女は同等に扱ってくれる。

王女様なのに偉ぶっているところもない。こんな素敵な友達ができて、本当に嬉しい。

「それにしてもクリステイ様は相変わらずね……。セリーナ、婚約者のことはもういいの？」

レイビス様から聞いたのか、シェリルは私がカイン様との婚約を解消したことを知っていた。婚約を解消しても、毎日顔を合わせなければならぬのは正直氣まずい。けれど、彼への愛は本当になくなっていた。

「運命の相手じゃなかっただけよ……なんて、格好つけちゃった。彼は変わってしまった。婚約したばかりの時は、私のことだけを見てくれていたし、私が落ち込んでいたらすぐに気づいてくれていたの」

シェリルは、私の話を真剣に聞いてくれている。

「この学園に入学して、幼馴染だったクリステイ様と過ごすうちに、彼の心には私がいなくなっていたわ」

カイン様は侯爵令息だ。そんな彼が子爵家の私と婚約してくれたことには感謝している。もしかしたらそれも、優しいカイン様が私に同情しただけなのではと思えてくるけれど。

「少し、羨ましいな……。あ、ごめん！ セリーナが悲しい思いをしてるのに……。ただね、私はそんな顔をするほど、誰かを好きになったことがないから。羨ましいなって」

そんな風に言われると、カイン様を好きになったことも無駄じゃなかったのだと思えた。

誰かを好きになることは、悪いことじゃない。

「ありがとう、シェリル。なんだか元氣が出た氣がする」

「お礼を言われるようなことじゃないけど……。ねえ！ もうカイン様への氣持ちがないなら、次の婚約者にはお兄様なんてどうかかな？」

シェリルが目を輝かせて、とんでもないことを提案してくる。

レイビス様には何度も助けてもらっているし、嫌ではないけれど……

「それはないよ。身分が違いすぎるし」

そう、そもそも身分が違いすぎる。レイビス様が私を助けてくれたのも、クリステイ様の本性を知っているからというだけだろうし。

「なにを言っているの？ 身分なら充分じゃない」

シェリルの言っている意味がわからず、首をかしげる。

一国の王太子妃だなんて、他国の王族か自国の高位貴族でなければ到底無理だろう。大国グランディ王国となれば、なおさらだ。

それなのに、ただの子爵令嬢でしかない私の身分が充分だなんて訳がわからない。

シェリルは、勘違いしているのだろうか？

「あれ？ もしかして、知らないの？」

「なにを？」

なんだか怖くなってきた。

「セリーナのお母様であるマリエル様は、スフィリル帝国の第一皇女様よ」

そんなはずはない。お母様は、他国の男爵令嬢だったと聞いている。一代限りの男爵だったおじい様が亡くなり、他に親戚はいないと。

スフィリル帝国は世界一の大帝國だ。そんな大帝國の皇女様が、他国の子爵であるお父様と結婚

するなんてありえない。

やっぱり、シェリルは勘違いしているのだ。

「勘違いよ。お母様は男爵令嬢だったもの」

お母様の記憶はほとんどないけれど、笑顔だけは鮮明に思い出せる。陽だまりのような、あたたかい笑顔だった。

「やっぱり、セリーナには話していなかったのね……」

「どういうこと？」

「私もつい最近知ったことだけれど、情報は確かよ。それにスフィリル帝国の皇帝陛下自らが、ブランカ子爵邸にお忍びで訪問したことがあるとも聞いているわ。現皇帝は、マリエル様の弟君よ」にわかには信じられないけれど、その話が本当だとしたら、お母様は身分を超えてお父様を選んだことになる。それは、とても素敵だと思った。

「お母様が何者でも、私は私よ。その話は、他の人には言わないで」

私は男爵令嬢だったお母様と、子爵のお父様の娘。

それに、たとえシェリルの言葉が真実としても、お父様の口から聞きたい。

「誰にも話すつもりはないわ。お兄様でさえ知らないもの」

「レイビス様も？」

「ええ、だから安心して。お兄様がセリーナにちよっかいを出すのは、セリーナ自身のこと気がなっているからよ」

「安心して……私は別に……」

「顔が赤くなっているけど？」

レイビス様は知らないと聞いて、ホッとしている自分がいる。

身分なんて関係なく、彼は何度も私を助けてくれた。レイビス様は、そういう方だ。それが嬉しかった。

でも、シェリルには教えてあげない。だって、すぐからかうんだもの。

「レイビス様には気をつけて、って言ってなかった？」

頬を膨らませながら、シェリルを見る。

「だって、お兄様ったら私より先にセリーナと仲良くなっているんだもの。ズルいわ！」

まるで、おもちゃの取り合い……

「シェリルのこと、大切な友達だと思ってる。まだ出会ったばかりだけど、前から知っていたみたいに懐かしい感じがするの。だから、レイビス様に妬く必要なんてないわ」

「セリーナー!!」

子供みたいに私に抱きついてきたシェリル。よしよしと頭を撫でると、彼女は嬉しそうに微笑んだ。

シェリルを部屋に送り届けた後、私は出かける準備をするようメーガンに言った。
お母様のことが、やっぱり気になる。

シェリルから聞いた話では、スフィリル帝国の皇帝陛下がお父様を訪ねたのは二年前だそう。私はその時学園寮にいたから、なにも知らなかった。

それより、お母様が亡くなったのは十一年も前だというのに、なぜそんなに時間が経ってから？ 真実を知りたい。それにお父様が一人で悩んでいるなら、力になりたい。

学園に明日の分の欠席届を出して、メーガンとともに馬車に乗り込む。ブランカ子爵家の屋敷までは馬車で三時間ほどだ。今は十九時だから、到着は二十二時頃だろう。

お父様は、いつも遅くまでお仕事をしているから、寝る前には間に合うはず。

「セリーナ!? こんな夜更けにどうしたんだ!？」

私を見たお父様は、なにがあつたのかと慌てていた。

「お母様のことで、お聞きしたいことがあります」

真剣な私の顔を見て、お父様はなにかを察したようだった。

「来なさい」

そう言つて、書斎へ向かつて歩き出す。

覚悟を決めたような表情。お父様のこんな真剣な顔を見たのは初めてで、少し戸惑う。家族のこととはなんでもわかつているつもりだったけれど、まだまだ知らないことは多かったようだ。

書斎に入り「座りなさい」と言つたきり、お父様は黙り込んだ。私は素直にイスに座り、お父様が話し出すのを待っていた。

数分……いや、十分くらい経つただろうか。ようやくお父様が口を開く。

「スフィリル帝国に滞在している時に、おまえの母、マリエルと出会つた。私の、一目惚れだった。明るくて、いつも笑顔を絶やさないマリエルを好きになり、結婚を申し込んだのだが……彼女はそれまで、自分は男爵令嬢だと言つていたんだ」

お母様の気持ちが少しだけわかる。身分なんて関係なく、お父様と過ごしたかったのだろう。

「彼女は全てを話してくれたよ。その時マリエルは、スフィリル帝国の帝位継承順位第一位だった。他国の子爵との結婚など許されるはずもなかった。それなのにマリエルは継承権を弟君に譲り、国を出て私と結婚してくれた」

お母様のお父様……当時の皇帝陛下は、国を捨ててお父様との結婚を選んだお母様を許せなかったそう。お母様が亡くなったと知らせても、葬儀に姿を現すことはなかった。

しかし二年前、前皇帝陛下が亡くなり、新たに即位した現皇帝陛下がお父様を訪ねてきたということだった。

「陛下は、おまえをスフィリル帝国に迎えたいそう。おまえが学園を卒業したら全て話すつもりだったのだが、誰かから聞いたのだな」

お父様は、私に話すのは学園を卒業するまで待つてほしいと陛下に頼んだ。

もちろん、断るつもりではいたようだ。けれど、私の気持ちを尊重するために、選択肢を残そうとしてくれた。

陛下が私をスフィリル帝国に連れ帰りたい理由はわからないけれど、帝国のために利用するつも

りなのではないかとお父様は懸念^{けねん}しているようだ。要するに、政略結婚の道具にされるのでは、とカイン様という婚約者がいたからお父様は安心していたようだけれど、まさか私が婚約を解消するとは思っていなかったのだ。

「お話はわかりました。皇帝陛下のお考えは私にはわかりませんが、素直に利用されるつもりはありません。私はお父様とお母様の子ですよ？ 結婚相手は、自分で決めます」

私の返事を聞いたお父様は安心したのか、全身の力が抜けたようにソファーにもたれかかった。「そうだな。おまえはマリエルにそっくりだ。容姿もそうだが、内面もよく似ている。おまえが思うようにしなさい。おまえが選んだ道なら、私は応援するよ」

お父様は、いつだって私たちのしたいようにしなさいと言ってくれる。カイン様とのことで心配をかけてしまったけれど、これからは自分らしく生きていこうと改めて思った。

第四章 お茶会への誘い

その日は、そのまま実家に泊まった。翌朝には学園に戻るつもりだったのだけれど……

「姉上〜！ いつお戻りになったのですか？」

サミュエルの顔を見たら、すぐに帰るなんてできなかった。

「昨日の夜よ。サミュエルは眠っていたから」

「起こしてくださいよ！ 僕がどれだけ姉上に会いたかったか！」

サミュエルは素直で、すごくいい子に育ってくれた。

「なんて可愛い弟なの〜」

わしゃわしゃと頭を撫^なでると、サミュエルは照れくさそうに「やめてよ〜」と言いながら微笑む。

「僕、前よりずっと強くなっただけです！ 姉上を守るように、もっともっと強くなります！」

サミュエルは最近、剣術を習いはじめたらしい。私を守りたいなんて涙が出そうだ。私は本当に、家族に恵まれている。

最高に可愛い弟の顔を見たら、辛かったことなんて一気に吹き飛んでしまった。

「剣術も大切だけれど、勉強もしっかりしなければダメよ」

「勉強は苦手ですが、頑張ります……」